

清初旗地に關する滿文老檔の記事（下）

鴛 淵

一

III、天命八年三月四日の記事

此の記事は次に述べる如く、I II IVと異なつて明瞭に某旗の旗地として某々の地を與へたといふやうな書式でない。寧ろ考へ方によつては、單に各旗の旗兵の一部を防備の爲に移駐せしめたに過ぎぬとも言へるのであるが、其の移駐の際に於てその地が或旗の兵のため占據されるものとすれば、やはり之を旗地の一種と考へてもよいかと思はれるので、此に旗地に關する記事として述べる事にする。尙又此の記事は他の條と異り、八旗各個別に記されず、正鑲三旗を大體に一括して藍旗、白旗、黃旗、紅旗の順に記して居るのも、或は純然たる旗地と見做すべからざる事を示すものと考へるが、又之はその地が少かつたによる便宜的の事によるものと考へられぬ事もない。以下便宜四旗に分けて記して行かう。

1、藍旗に關して

niyehé sankin Ⅱに鑲藍旗の百馬甲を *se* 率めて駐す。何處の地であるか直に擬定し得ない。

foo-ho pu Ⅱに兩白旗・兩藍旗の四百馬甲を *adahan, sonche* 率めて駐す。

之はその音の上よりして草河堡に當つべきものと考へる。即ち鴨綠江の支流の一である潮河の上流

左岸に記される草河城に擬すべきであらうか。此の地は天命六年三月遼陽陥落と前後して降つた城堡の一である。(二排)

fung-ji pu 〓に正藍旗の三牛余を鑲白旗の *adaha* 率めて駐す。

之は音の上より奉集堡に當つべき事、Ⅱの(1)正黃旗々地の場合と同じである。遼陽の東南・遼陽の東北の地で、天命六年三月來降した城堡の一である。(二排)然し天命七年四月に於ては、此の地は正黃旗の旗地として見えて居るから、約一年後の八年三月に至り、何等かの理由によつて右の如く藍旗兵が駐屯するに至つたのでなからうかと想像される。

2、白旗に關して

siyaha 〓に鑲白旗の百馬甲を *mensusen* 率めて駐す。

之は音の上からして興京の北方、永陵の東に記されて居る *siyaha wei* 夾河窩集の *siyaha* に當つべきか(二排)、或は興京の側なる *siyaha dha* 加哈河の *siyaha* に當つべきか、何れか一つであらうと思はれる。思ふにこの窩集と河は隣接して居るから、何れかが原名と解すべきものであらうが、滿洲語 *siyaha* は「落葉」の義がある所からすれば、窩集の方が原名に近いであらう。然しこの際の駐屯の地としては、寧ろ興京により近き加哈河に擬定する方が妥當かと考へる。

tsoo-ho pu 〓に兩白旗・兩藍旗の四百馬甲を *aidahan, saiche* 率めて駐す。

之は(1)の藍旗の項に述べたやうに草河堡に擬定すべく、可成り廣い地面であつた爲、兩白・兩藍の

四旗より兵を選んで駐せしめたのであらうか。

undehen ho Ⅱに鑲白旗の五十馬甲を muhalyan 率ゐて駐す。

之は吉林城の南方の溫德亨河 undehen hira に當つべきもののやうである。(三排) 但し然る時前二地と可成りかけ離れて其間何等の連絡關係もないやうに思はれ、果して如何と考へられるが、音の上より又河名の點よりして、右の如く擬定して差支ない。(後節参照)

sioyan ju'e 16 の gio meiche Ⅱの間に正白旗の四半条を eichen 率ゐて駐す。

sioyan ju'e の sioyan は Ⅱ(6)正藍旗の項の岫巖と同地と考へられ、又 Ⅲe は滿洲語「水の澄明な深淵」・「兵の見張り所」の義であるから、岫巖附近の水邊、或は岫巖の屯所といふ意義に解すべきものかと思ふ。gio meiche の meiche は滿洲語山坂の義であるから 16 坂と解すべく、岫巖附近の地名と解される。

3、黃旗に關して

samxan Ⅱに正黃旗の百馬甲を langjihu 率ゐて駐す。

輿圖等に十分擬定し得べき地名を見出し得ないが或は讎廠城、同邊門外の薩木禪山 samxan aia に擬定すべきかとも考へる。(二排四排)

yalgege Ⅱに鑲黃旗の百馬甲を mikan 率ゐて駐す。

之は音の上から渾河の本流たる英額河の上源に在る英額城、英額邊門地方に當てて差支ないと思

ふ。(二排)
(四排)

lan ho 〓 に正黃旗の四牛糸を鑲黃旗の二牛糸率ゐて馳す。

音の上からして鐵嶺南方の范河沿岸の范河城に擬せられるものと思ふ。(二排)
天命六年三月來降し
た城堡の一である。(四排)

tung-yuwan pu 〓 に兩紅旗・兩黃旗の四百馬甲を mina 率ゐて駐す。

之は音の上からして通遠堡と譯さるべきものと考へられるが、明代遼東の邊牆、墩臺の中には通遠堡なるものは見出されず、何處の地なるか明らかでない。

4、紅旗に關して

tung-yuwan pu 〓 に兩紅旗・兩黃旗の四百馬甲を mina 率ゐて駐す。(前項参照)

chin 〓 に正紅旗三牛糸を sosin, kyangkyan 率ゐて駐す。

之は 〓 (2) の項にも見える如く鐵嶺に當る事は言ふ迄もなく、天命四年七月太祖の占據した重要地區である。輿圖には *tyei ling* と記してある。(二排)
(四排)

sung-kan pu 〓 に鑲紅旗の三牛糸を subsingga 率ゐて駐す。

之は松山堡にあたるものと考へる。輿圖によれば、哈達河北岸、哈達城の西北に松山堡あり、又界凡城の北方、渾河部に松山堡峯なる名を記して居る。この何れかに當つべきものと思ふが、その字音の上よりして、又一般地形からして前者を探るべきでないかと考へる。(二排)
(四排)

以上が各旗に關して個別的に記した地名であるが、最後に、「*Sintangay* II に八旗より選擇せる四百馬甲を *soolai* 牛糸の *mito* 率ゝて駐す」と記して、この記事を終つて居る。*Sintangay* は II (4) の項に記した如く、十方寺堡に當つて然るべき地である。(二排)

然らば右の記事によつて、十餘ヶ所の地に相當數の馬甲や牛糸が派遣された事が知られる。それが果して嚴密な意味に於ける旗地の分與であるかは前に一言する如く疑問であり、又假りに旗地であるとしても、各旗に就いて記された土地と土地は互に遠く離れて地理的にはその間何等の連絡もないやうであり、殊にその地と地との間に他旗の旗地が舊のままに存して居るとすれば、旗地の構成上甚だ不可解のものやうに思はれる。この點からして或は之は嚴密な意味の旗地ではなくて、一時の便宜に本く防備の爲に、各旗より兵を選抜して出したに過ぎないのでないかと思はれる。馬甲と譯した原語 *mito* は清文鑑卷八、兵類の解によれば「牛糸内より選んだ兵士」といふ事であり、最後の十方寺に駐兵の項にも「八旗より *simtole* (選拔されたる) 四百馬甲……」とあるから、防備の爲に特に選拔された一部の兵士が夫々の地に赴いたと解する方がよいと思はれる。然し一方からすれば、既に夫々の旗の兵士を新に駐防せしめる以上、その所駐の地を以て新なる旗地と見做し得ない事もなく、特殊の必要からして新に與へた旗地と考へて差支へないとも言へる。但その際鐵嶺・奉集堡等には他旗が居つたのであるから、その地に別の旗兵が赴いたとすれば、多少煩はしい關係も起きた事なるべく、殊に十方字堡の如く八旗から夫々兵士が駐したものとすれば、旗地としては共有といふ外なく、その點は草河堡・通遠堡に於ても同じく四旗の共有と解せられるが、とに角一種過渡的・便宜的な處置としてかかる方策が講ぜられたものとして、暫く旗地

に關する記事の一と考へ、此八年三月の記事を擧げて置く事にする。

IV、天命八年六月十八日の記事。

Ⅲの記事は一種變態的のものとしても、滿文老檔はその後僅々三ヶ月なる六月十八日に至つて更に貴重なる記事を示して居る。それは次に述べる如き記事で、その書式は天命七年四月の條の如き「……旗の收めんとする城……」でもなければ、又八年三月の條の如く「……旗の馬甲が……に駐す」といふのでもなく、單に「……旗に……の一部」といふ書き方である。従つて果して以前の旗地より新に移轉した事を意味するのか、それとも別に旗地を與へた事をいふのか、その記事からは明らかにし得ない。然しその内容よりして、新しい地域が次に述べる如く舊呼倫四部の領域方面、或は佟佳江上流に互るものの如くである以上、その地方が特に廣大なる肥沃なる土地でない限り、前の旗地の外にこれ等の地方をも夫々所領として與へたものであると考へるのが妥當のやうである。それには本稿最後に述べるやうな事由がありはせぬかと考へるのである。そこで先づその記事に就いて土地を擬定してみよう。

1、鑲黃旗

yehe の sanggiyan hada = yehe は葉赫に相違なく、sanggiyan hada は意譯すれば白山・白峯となる。然し輿

圖始めこの方面の地圖に、葉赫の近傍にかかる名稱の山峯を見出し得ない。但、撫順北方の有名な尙間崖は滿文で sanggiyan hada と寫されて居るから、之に當るものとみても字音の上からは背て差

支ないが、果してこの地を「葉赫の……」と言へるか否か、些さか疑はしい。(二排)

(四)

sehen 〓 輿圖(三排)によれば、烏拉城の東方に於て宜罕山城の直東に sehen hada(塞赫哩峰)あり、更にその東北に sehen ain(塞赫哩山)といふのがあるが、この何れかに當るのでないかと思ふ。吉林通志卷一 輿地志六 山川一に、色赫哩峰。城東北三十里。とあり、又、塞赫哩山。城東北一百二十里。周十里。とあるのが、右輿圖の二地に當るのであらう。然しそれにしてはこの條他の地名とはなれすぎる感あり、葉赫方面に求むべきでないかと考へられる。(後述)

yaha muké 〓 輿圖(三排)に葉赫城の東方に當つて記されて居る大小の雅哈河を指すものと思ふ。mukéは水の義で、此では河を意味するものと解して差支なからう。吉林通志卷二 輿地志十、山川六に、赫爾蘇河の上源に、大孤山河。一曰昂邦雅哈河。因其西有阿濟格雅哈河。故以昂邦別之。昂邦大也。阿濟格小也。と記して居る如く、この大小雅哈河は赫爾蘇城の東方を南から北に向つて流れて、西方に於て北流する赫爾蘇河と合流する事が、輿圖によつても明らかに認められる。

hada 〓 之は言ふ迄もなく哈達部・哈達城の哈達である。輿圖(二排)では界凡城の北方に當つて比較的近く記されて居る。

uluri meijen より彼方 teke に向つて 〓 uluri meijen は輿圖(三排)に葉赫城の東方、哈達城の東北に當つて記される uluri ain 烏魯哩山に當るものと思ふ。meijen は滿洲語「頸」の義であるが、或は山坡の義である meijele と同類の語と見得るではなからうか。吉林通志卷一 伊通州の條に、烏魯哩山。在州境。距吉林城西南四百七十里。高三里周三十里。烏魯哩河發源於此。とあるのがこれであらう。又 teke

は輿圖(三辨)の雅哈河、雅哈城の北方に記される勒克山 *leke ahi* に當るものと思ふ。吉林通志卷一に、拉克山。城西北四百一十二里。高二里餘。周百餘里。とあるのが之であらう。尙附圖の伊通州圖には、伊通州の北四十餘里に勒克山を認めてある。然る時この項は烏魯哩山よりその東北勒克山にかけた一帯の地方といふ意味に解し得るであらう。

右によればこの旗地は大體哈達の東北方、葉赫の東方地區にあるものと見て差支ない。但し、*selen*のみ餘りに懸け離れて居る如く、その間後に述べる正紅旗の地區があるのは甚だ解し難い。その點よりすれば、吉林通志卷一に前述とは別に、塞赫哩山。城西南四百餘里。高一里餘。と言つて居るのが、輿圖には示されて居ないが、全體的にみて妥當のやうであるから、或は赫爾蘇河の上源山地を指すものかと想像される。とにかく舊の哩達と葉赫とを中心にした一地區と考へてよい。

2、正黃旗

bohu i mairan より彼方…… || *mairan* は滿洲語肩の義であるから、山の中腹以上の地を意味するものか、と思ふが、此では單に固有名詞の如く解すべきであらう。*bohu* に當る地名は輿圖にないが、吉林通志卷一に、博屯(一作博敦)山。城西北二百里。高一百步。周三十里。とある博屯山に當るものならば、吉林の西北で烏拉城の西方の山にでも當つべきであらうか。

che-orongga-taym より後方…… || 之は一連の地名と見做すべきであらう。*che* 惡 *orongga* 魂ある *daym* 富

富者と解する時、何か由緒ある地名らしいが、輿圖にも吉林通志にも見出されない。

mag-yaho 〓之も輿圖に見えない、然し吉林通志^{卷一}、疆城上、屯鎮の條に、正西距城一百二十五里。馬家

屯とあり、吉林府圖によれば吉林城の西南にあたり、蒐登站(seoden gyamun)の西南三十里位の所に、馬家屯を記して居るものに、關係あるものでなからうか。hoは他の例に於ても見るやうに「河」の字音であるから、mag-yah 即ち馬家の河の義で、馬家屯の側を流れる河を指すものかと考へる。吉林府圖によれば馬家屯は伊勒們河の東、蘇通河の上流の所に記されるから、恐らく薩倫河の東の伊拉齊河或はその附近の小河にでも擬定さるべきものかと想像する。(參照^{三排三})

lan-muhalyan 〓輿圖^(三排)によれば、輝發城の西北に lan muhalyan ain (伊蘭穆哈連山)とあるのが、之に當るのではないかと思ふ。乃ち吉林通志^{卷八}の 伊蘭穆哈連山。城西南四百里。三峰並峙。高八十步。周二里。拉訥河發源於此。とある山である事疑なく、lan は三 muhalyan は毳・圓の義で三峰鼎座して居る狀に因んだ名であらう。

右によれば初めの二個所が不明な爲、明確な地域は分らないが、大體輝發西北の伊蘭穆哈連山の邊から西北薩倫河にかけ、更にその北方地區に細長く存した一地方のやうに解せられる。薩倫河の東方の蒐登・綏哈は次の正紅旗地内に在り、薩倫河は鑾藍旗地内に在るやうであるから、その間の南北に細長い地區の如く解せざるを得ない。

3、正紅旗

hajan 〓不明。

sulha 〓輿圖^(三排)に吉林城の西南に見える綏哈城 sulha hoton に當るものと思ふ。吉林通志^{卷二} 輿地志^二

城池の項、綏哈城に「城西五十里。周一里……」と記すのも必ずやこの城の事であると思はれる。

seoden 〓 輿圖(三排)に綏哈城の直西に seoden gyanun 蒐登站と記されるものに當ると思ふ。吉林通志卷一

輿地志三 疆城上、屯鎮の條に 正西北距城六十里前蒐登河屯。西北距距城六十里腰蒐登河屯。六十

六里後蒐登河屯。と記される三の蒐登河屯といふのは恐らく右と關係あるものなるべく、吉林府圖には吉林の西方に蒐登站を記して居る。(2)の margato より東方に在つて極めて接近して居た土地のやうである。

fulgiyai debagan 〓 より東… 〓 fulgiyai は「鹿の毛皮」の義であるが、寧ろ紅、赤の fulgiyan に因んだ語であり、dabagan は峠の義であるから、岩山、秃山を指すものと思はれるが、輿圖、吉林通志に見出す事を得ない。

dayannga より西… 〓 輿圖(二排)によれば、英額邊門外東北に dayannga den nin 達揚阿高山といふ山がある。之は吉林通志卷一に伊通州の山として、在州境。距吉林城西南五百餘里。と記して居る達揚阿山に當り、又別に達揚阿嶺として同様の記事を記して居るのとも相當るのであらう。然しこれ等の達揚阿山が此の項目の dayannga に當るとすれば、吉林城から非常に遠隔の地となり、それより西といふ事は、到底吉林城より僅か五六十里の西に在る綏哈・蒐登等の地との關係に於て承服しかねる所である。fulgiyai dabagan の次にある「より東」の語が綏哈・蒐登にかかるとすれば尙更の事、かからぬにしても dayannga がかくの如く西に在つて更にその西方といふ事になれば、全くそ

の關係は絶たれ緣故がなくなる事となる。然る時はこの地は吉林城附近或はその東方に求むべきが
妥當のやうであるが、今輿圖・吉林通志等に見出す事を得ない。

sur'yung 古城の譯音と思はれる。然し吉林通志^{卷二}輿地志^十城池の條によれば、吉林を中心として古城は

相當多數記されるにかかはらず、輿圖には少しも記されず、僅かに哈達の東方に一つ記されて居る
に過ぎない。此の地は danganga より西…といふ點に於ては當らぬでもないが、然る時は愈々綏哈菟
登と離れすぎて何等の關係も認め得ないから、此の地と解する事は出来ぬ。寧ろ吉林城東北の宣翠
山城か、^①吉林通志に見える城北八十四里、城西南五十里、等と記される古城かに擬定すべきでない
かと考へる。

toho-ro 不明。滿洲語としては車輪とか環とか方形の文鎮といった意味を有つて居るが、地名としては擬定
する所を見出し得ない。輿圖^(四排)に清河城の東に toho-ro hira 托和囉河があるが、この地とは到
底考へられないやうである。

以上述る如く正紅旗地は、不明の地名多く確たる事を言ひ得ないのであるが、蒐登や綏哈の地から考へて大體
吉林を中心とした一地區でないかと推測するのが穩當のやうである。前述の正黃旗の東北に當つて分與された一
地區と考へたい。

4、鑲紅旗

abdari より西、che sun より東…若し初めの abdari が萬曆四十七年明の劉綎の軍が太祖の爲に敗られた

といふ阿布達哩岡 *abdari aha* であるならば、それは佟佳江の上流、棟鄂河の北方の地でなければならぬ。而して輿圖(二排)にはこれより外にこの名なく、吉林通志には之に當る地名を見出し得ない。然らば此の地は同じ邊疆外でもずつと南方の地であり、前三旗が呼倫四部の舊地に關係あるのと可成り縁遠い感があるが、朝鮮に對する關係からして、此方面に一旗の地を與へ防備せしめたと解すべきであるまいか。又 *che sun* といふ地名は輿圖、吉林通志等に見當らぬが、若し *abdari* が右の如くであれば、これより西方で邊疆附近に迫る邊であり、或は靈陽堡を意譯して稱したものでないかと想像されるが明らかでない。③

chung より後方 *mahatu ninggu* より彼方：この兩地名共不明である。

sanggiyan hada に至る迄 〓 この名は(1)にも出て來たが同地であるや疑はしい。尙撫順東北方の尙間崖とすれば、興京その他の地區が介在する事となり、他旗との關係上贊成しかねる。やはり阿布達哩岡に近く、佟佳江の上流方面に求むべきでなからうか。

以上鑲紅旗々地は他旗に比して最も不明であるが、前述の *andari* が佟佳江上流地方であると言ひ得るならば、恐らく先に棟果部(董鄂)の勢力圏であつた佟佳江上源地を大體その地域とするもので、この旗を以て南方朝鮮に對する守りに備へたものでないかと考へる。

5、鑲藍旗

lobaku golo, nikata birgan より彼方：この二地も不明である。*golo* は滿洲語路、省の義であるから、何處

かに在つた路と、*birga* は小川の義であるから、一の川名とを指すものである事には違ひないが、輿圖に見當らない。次に出て来る地名との關係からして、吉林城の附近と思はれるのみである。

salun 〓 輿圖(三排)に吉林城の西方に在り、綏哈城よりも更に西に位する薩倫嶺、薩倫河の名に因むものと

解せられる。吉林通志^{卷一}に、薩倫嶺。城西一百二十里。とあり、同^{卷二}山川^五に、「伊勒們河。既

受蘇幹延河北流。折而東逕蓮花泡屯北。薩拉河自南來入……」の注に、薩拉河一曰薩龍。今日舍路皆以音近致訛也として上流は呼蘭山より出づる事を記して居る所の薩拉河、薩龍河即ち舍路河といふのは薩倫河を指すものと思ふ。故に此に所謂 *salun* は右の嶺と河の中間邊の地名と見る事が出来るのではなからうか。

si 〓 之も輿圖には見えぬが、吉林通志^{卷一}の桂兒彰嶺、城西一百十里。とあるものに當るものでなからうか。然る時は薩倫嶺の稍東方に在り、綏哈城との中間に在つた土地と考へ得るわけである。

huju 〓 之は輿圖(四排)伊屯邊門の東南に近く位する *huju dabagan* 呼珠嶺にあたるであらうか。蘇瓦延河の西方に在り、前の薩倫より西北に當つて位置するわけである。吉林通志^{卷一}に、瑚珠嶺。城西二百二十里。と記して居る瑚珠嶺も之を指すものであらう。

suwayan jidun 〓 *jidun* は山の尾根、山背の義であるから岡と解してよいとすれば、この地名は輿圖(三排)の

suwayan mudun 蘇瓦延岡に擬定し得る。或は此から流れ出る河に *suwayan birga* あり、その左岸に

suwayan giyanna 蘇瓦延站があるから、これを指すものとみても大して誤りはなからう。何れも前

記の呼珠嶺の東南に當る地で、吉林通志卷一に、蘇韓延岡。城西一百六十九里。周百餘里。と記し

て居るのも、右の蘇瓦延岡に當るものと考へる。^④

□ hada 〓 不明。

ian hada 〓 の名は輿圖に見えないが、⁽²⁾で述べた所の輿圖(二排)に見える ian muhalyan aih 伊蘭穆哈連

山と記されるものに當るとは考へられないだらうか。前記の如く吉林通志卷一によると、伊蘭穆哈

連山。城西南四百里。三峯並峙。高八十步。周二里。拉忻河發源於此。と記して居る。その三つの

山峯といふ所はよく一致する事であり、又その位置も薩倫嶺の東南地方に當り、この位地として肯

て差支ないと思ふ。然る時は正黃旗地と此方面で相接したものであらう。

以上の如くであれば、此の鑲藍旗地は伊屯遼門の東南の地よりずっと東南にかけて、正紅・正黃二旗の西方に斜めに存したものと考へ得る。之も地域としては細長いものとなるが、何かの都合でかくなつたものと想像される。

6、正藍旗

ulri meien 〓 り molokji 〓 向へて ulri 此一部分。〓 ulri meien は既に(1)の鑲黃旗の條に見えた所の地名である。即ち葉赫の東方の烏嚕哩山を言ふものであらう。molokji は不明である。後の ulri も ulri meien と關係あるものと考へられるが、全體として何處の地區を指すかはつきりしない。

右の如くであるからこの旗地は明らかでないが、恐らく鑲黃旗の東南に接し、最も遼牆に接近して居た餘り廣

くない地域であつたかと想像される。

7、正白旗

tumen の [] より後方、Hyoo-gu-tan の河より前方… || 輿圖(二排)によれば英額邊門の東南に當つて Hyoo-gu-tan bira 遼孤山河が記されて居る。これが此に見える所のものと考へる。又 tumen の [] とあるのは、恐らく tumen bira 圖們河を意味するもので、輿圖(三排)によれば輝發城の西方三屯河の西にある河となつて居るものに當るものと思はれる。前記の Hyoo-gu-tan bira が東北流して輝發城の北に及ぶ時、この tumen bira が北流して合流するのであるから、この兩地名よりして、この河の間の地方を含むものと解せられる。その圖們河より後方、遼孤山河より前方といふのも、圖們河の北、遼孤山河の南を意味するのであるから、この河に挟まれた地區で、場合によつては輝發城方面も入るかも知れない。

botun の Cargi meiren より此方… botun は (2) 正黃旗の項に述べた吉林の西北二百里に在る博屯山であらうか。Cargi meiren はその博屯山の一部の山峰を意味するのであらう。Cargi は滿洲語「彼方、あちら」の義であるが、此では Cargi meiren として固有名詞と見做す方がよからう。然し前條に述べた tumen, Hyoo-gu-tan bira が俱に輝發城の西乃至西南の地とすれば、これでは餘りに北に離れすぎる感があり、果して右の如き botun と解し得るか疑はしい。或は Hyoo-gu-tan bira の附近に求むべき地名かとも想像される。

tasba muhalyanに向(つ)て…之も不明であるが、既に前述の如く此の旗の他の土地が擬定される時、此地名も輝發城近傍に求めるのが妥當であらうか。tasbaは虎 muhalyanは獸、圓の義で、恐らく山名と解される。

以上の如くであるから、この正白旗々地は大體輝發の西、西南方面に於て、英額邊門東南方面迄横はつた地區であり、その南に鑲紅旗々地が連つたものと解するのである。

8、鑲白旗

mahalu ninggu より此方 hulan に至る迄(4)鑲紅旗の條に述べた如く mahalu ninggu は不明であるが、或は佟佳江上源に近い方面の山峰を指すものかと考へられる。hulan は呼蘭といふ漢字に當るものであらうが、若し呼蘭哈達の事とすれば、此名は諸處に認められこの際何れを意味するか明らかでない。然しその中で一つの考へ方は、此處では、輿圖(三排)に見える輝發城東北、吉林城東南の呼蘭哈達、又は呼蘭河 hulan dia を指すものでないかといふ事である。然し(5)の salin の項に述べた如く薩龍河の上源が呼蘭山に出るといふ事からして、吉林府圖の岔路河の上源の呼蘭泊—呼蘭山街とある方面の山を指すものとすれば、この地は吉林城の西南輝發城の西北といふ事になる。二地さほど離れても居ないが、全體の關係からしては何れかといへば、後者を採るべきもののやうに思はれる。

Dirjen より前方(南方)…不明である。先に丁天命六年閏二月の記事の中(6)の Dorim の旗に屬する地の條

にて、滿洲實錄卷八に見える *ᡩᠠᡳᡳᡳ* を必音(?)として深陽より二日程位の地かと想像したが、それではこの際當てはまらない。

Iyoo-gu-gan の水より後方(北方)……(7)正白旗の條で述べた遼孤山河に當ると思ふ。

yaki-jidan, fulha より其方……前者は *ᡩᠠᡳᡳᡳ* 岡(山の尾根、山背)と譯し得る地で、輿圖には見えぬが、吉林通

志^{卷八} 伊通州の條に、雅奇山。在州境。距吉林城西南五百餘里。と記して居るものに擬定されるの

でないかと考へる。吉林城西南五百餘里といへば、前述の *ᡩᠠᡳᡳᡳ* 山も同じく吉林城西南五百里

といふ事であるから、恐らくその附近に存する岡と考へ得るであらう。又 *ᡩᠠᡳᡳᡳ* は輿圖(四^{二排})によ

れば *ᡩᠠᡳᡳᡳ* 山の東方に記される *ᡩᠠᡳᡳᡳ* 富勒哈河に當ると思はれる。吉林通志^{卷八} 伊通州の條

に、富勒哈山。在州境。距吉林城西南五百餘里。高五十步。周一里。とある富勒哈山は前記の雅奇

山と相近い山と考へられるが、若し之が富勒哈河の發源地と言ひ得るならば、此に所謂 *ᡩᠠᡳᡳᡳ* は

の山と河の地方を指すものであつて、遼孤山河の北方に在る事となり好都合のやうにも思はれる。

tele より此方……輿圖(二^{三排})によると輝發城の北方に *tele* *ᡩᠠᡳᡳᡳ* 德佛河があるが、之に當るものと思へる。

以上綜合してみると、鑲白旗地は遼孤山河より北は富勒哈河又は富勒哈山に及び、東は薩倫河の上源の呼蘭山より輝發城北方の德佛河方面に亙つた地區のやうに考へられ、大體輝發城の西方に在つた地域と言ひ得るであらう。

以上述る如く天命八年六月十八日の條に見える新しい八旗の旗地は、略々舊呼倫四部の地より佟佳江上流に互つた地域と考へ得る。今一度その地區を約言すれば、

鑲黃旗―葉赫を中心としてその東方、哈達を含む地方。

正黃旗―輝發西北伊爾穆哈連山より西北薩倫河に及び、更に北方に細長く互つた地方。

正紅旗―吉林城を中心として、正黃旗の東北に在る一地域。

鑲紅旗―はるか南方にはなれて、佟佳江上流の地方を中心とした地域。

鑲藍旗―正黃旗の西より西南方に互つた地方で、又鑲黃旗の東方に存した地域。

正藍旗―鑲黃旗の東南、鑲藍旗の西南に介在して、最も邊牆に接近して居つた地域。

正白旗―輝發の西より西南方面、英額邊門の東南方面に互り、南方は鑲紅旗に接した地域。

鑲白旗―輝發の北方から西方にかけて存し、北に於て正黃鑲藍二旗と、西南に於て正白旗と接した

地域。

といふ事になる。換言すればその相對的位置は大約、鑲黃旗地が北方西端に在り、その東に細長く鑲藍旗地、東南に正藍旗地があり、鑲藍旗地の東に細長く正黃旗地、その正黃旗地の東方に正紅旗地があり、正黃・鑲藍兩旗地の東南に鑲白旗地、鑲白旗地の西より西南に正白旗地があり、最南端に鑲紅旗地が位置したといふわけである。かくの如く天命八年六月に至つて八旗の旗地は舊の旗地の外に新に

分與されたのであるが、之は言はば舊旗地の外廓に向つて擴張されたわけであつて、多年清太祖と抗争の相手であり、一時太祖を惱ました呼倫四部の地を全くその領域内に收め、更に南方佟佳江方面迄領域を擴張した事を意味する。清朝の完全なる領域は此に至つて初めて成立したのであつて非常な發展を遂げ擴大したものと云ひ得る。然しながら、太祖が呼倫の四部を討滅したのは、最後に天命年間亡んだ葉赫を除いて何れも天命建元以前はるか遠い時代の事である。従つて清朝としての勢力は夙にこの方面に及んだのであつて、今俄かにこの年に至つて及んだのではない。而して太祖が旗地を何時創設したかは先に述べる如く明らかでないにせよ、滿文老檔によれば少くとも天命七年四月に於て、開原鐵嶺以南の遼東の地方に旗地を分與してから僅か一年餘にして、俄かにこの外廓の地方に旗地を分與したといふ事は、何か彼をしてさうせしめた重大な事由があつたのでないかと思ふのである。無論内面的な理由として、旗人の増加といふ事を擧げ得る。投降者も増加して來た、又人口も自然的増加を見たであらう。故に舊の旗地のみでは狭小となり、新に地を擴張する爲に夫々新しい旗地を與へてその生計を安易ならしめようと策したと解し得る。先にも述べたやうに、八旗々民を國家存立の中心要素とした清朝として、旗民の生計の安易を圖る事は當然の措置であり又最も重大な關心事であつたから、その意味からして新旗地の設定を見るに至つたと解するのは、甚だ妥當な見解と考へる。然し開原以南、旅順口邊に迄至る地域に於て、八旗六萬（奴僕の数、或は旗に編入されぬ漢人鮮人の数が

幾何であるか不明である故、暫らく除外して、所謂旗兵のみ計算すれば原則として六萬といふ事になる)の民を養ふに不充分とは考へられぬ。又たとへ投降者が増加し、旗民が急に増加したにせよ、これだけの地域で俄かに狭小になつたとは考へられない。無論場所によつてはかゝる事もあつたらう、不毛の地といふやうな事もあつたらうけれども、それだけの理由で他に旗地を興へざるを得なくなつたととは考へられない。それにはかゝる内面的事由を全然没却するのでないが、それ以上の事由として對外的關係即ち明・蒙古・朝鮮に對する關係からして、かゝる新設の必要に迫られ、よつて以て既に征服された所の此舊呼倫四部その他の地方を完全に掌握支配せん事を企圖したのでないかと考へるのである。之に關して余の寡聞の致す所別に説を述べたものなく、單なる臆説にすぎぬとのそしりもあるかも知れぬが、余はかく解するのが妥當でないかと信するので、以下太祖の旗地設定を對外的關係方面より觀察し、之に就いて些さか私見を述べる事にする。

天命四年三月の薩爾滸の一戦に明軍を破つた清の太祖は、同六年三月遼陽を取り、次いで瀋陽を奪ふに至つて、俄然その勢力を遼東に伸出して來た。此に至つては明も安閑たり得ず、六年中頃より熊廷弼等を起用して之が對策を講ずる事となつた。^⑥廣寧中心の防備策がとへられ、山海關中心に守備を堅くして同時に陸海軍を整備すべしとの議も提唱された。かくて毛文龍の鎮江攻撃、登州・萊州よ

りの明海軍の進出の事等が次々に行はれたのは、攻勢方面の片鱗に外ならない。かくなれば太祖もその對策として同年九月より東京城の構築に着手し、以て遼西經略の基點を作り、遼東を確保せんとするの態度に出たのは當然の措置と云ふべきである。太祖が遼西經略を決行した始りは、天命七年正月十八日の事で、この時廣寧を屠つた爲に、明は益々山海關の防備、登萊水師の充實に狂奔するに至つた。よつて太祖は暫くの間、廣寧を中心に明への對策に腐心したが、今や明が山海關の防備を中心に、水軍や蒙古或は朝鮮を利用して三方より清軍を攻めんとするに當つては、一先づ廣寧の地を去つてその居城に歸り、國都の守を嚴にして後顧の憂を絶ち、後更に征明を策するのが肝要であつた。此に於て七年二月十七日太祖は遼陽城に歸り、次で四月四日未だ築城完了せざる東京城に移り、愈々此處を經路策源地として明への對策を謀る事としたのである。かゝる情勢に立ち到つて行はれたのが、内に於ける對策としての同年四月十八日の旗地設定の事でなからうかと考へる。それ迄旗地が定められて居たか否かは疑問であるが、よしんば定められたにしても極めて小範圍で、明に對する政策の遂行の上よりしては、所謂後顧の憂を絶つべく餘りに不充分であつたので、遼東の完全制覇の爲、又明に對する絶對安全防備強化の上からして、此にその所領の地を新に分割して、各々その地に就かしめ、以て後顧の憂なからしめ、更に進撃の素地を作つたものと考へる事は出来ないであらうか。乃ち藍旗が南方に置かれたのは、全く毛文龍や朝鮮の來侵に備へる爲で、之は明の王在晋が専ら毛文龍等を使喚

して南方より遼東に突入せしめんと謀つた事をみて識り得るであらう。黃旗や紅旗は専ら蒙古に當る爲のものである。之も王在晋が蒙古の反清派を懐柔し宿敵林丹汗を利用して、北より又廣寧方面より進撃せしめんとした事によつて充分首肯出来る。その林丹汗と明とは天命七年(天啓二年)八月に攻守同盟を結び、又同時に朮顔・哈喇慎等の諸虜も明に懐柔された。白旗が中間に在るのは南北の連絡の爲と、遼西に備へる意味が多分にあつたと見得られないであらうか。當時に於ける明の清への對策は一時的に效果あり、殊に同年八月王在晋が南京に轉出した後、孫承宗・袁崇煥等の積極論者が優勢となつてその積極策が用ひられてから、太祖も一時はそれに對應するに専らにして、積極的征明の舉に出る事が出来なかつた位であるから、この時に先立つて太祖として國土防衛の上より、又兵力整備の點からして、新に八旗々地を定めたといふ事は、蓋し最も當を得た方策であつたと考へる。以上が天命七年四月旗地を設定するに至つた理由の一でないかと考へるのであつて、「太祖在時守邊駐防原有定界」といふ句は此にも充分あてはまる事と思ふ。既に天命七年四月に於て右の如くであつたとすれば、其後明その他との關係が更に緊迫した天命八年六月に至つて、新に旗地が外廓に設けられた事も自ら之に關係あり淵源するとみて何等憚る所がない。乃ちその後にも明將毛文龍や朝鮮兵の活躍あり、蒙古の親明は愈々濃厚に、常に南より北より太祖を牽制した。殊に毛文龍は朝鮮と結んで遼東の南境東境のみならず、天命九年五月の如きは遠く輝發の地に迄入るといふ有様であつたから、太祖も容易

に明を攻める事が出来ないのみならず、國土を防守するの必要を痛感したであらうと思ふ。かゝる次第であるから從來の旗地は完全なる領域以外への呼倫四部の舊地を亦完全に支配するが爲に、此に八年六月に見られる如き旗地の分與を新にしたのでなからうか。その直前に兵を動かして居るのも、恐らく之と關係ある事であらう。故にその新旗地が主として従前の旗地の外廓たる呼倫四部の舊地に在り、更に佟佳江の棟鄂部の舊地に及んで居るのは、かくの如き考の下に國內の勢力配置を考慮してなされたものであると斷じたい。事實に於て太祖は七年二月遼陽城に歸還して以後、十一年正月十四日寧遠攻略に向ふ迄滿四年の間は、自ら進んで明に積極的に挑戦する事なかつたのは、彼にも似合はず専ら消極的に國を防守する事に没頭せざるを得なかつた爲であり、又天命八年六月に於ても遼河以西に出る事は不可能であつたから、東方北邊の外廓の地域に旗地を擴め、以てこの方面よりして國土を固めたものと考へるのである。而してかくの如く旗地の分配が内になされ、又外には消極的ながら蒙古や朝鮮に對して懷柔策が講せられて、安堵の確心を得るや、遂に十年三月瀋陽に遷都し、此に意を決して十一年正月遼西への再度の進出を企てたのである。

以上述る如く天命七年・八年の旗地設定は、一には内面的な事由として、内に於る旗人の生計の保證、安住の地を見出さしむるに在る事を舉げ得るが、又一には是により明・蒙古・朝鮮三勢力に對する防備の基地を定めんとしたものである事を舉げ得るのであつて、而して當時の形勢からして後者に相當

重きを置くべきものである事を注意したい。然る時、太祖の東京城遷移、瀋陽城遷居も自ら之に關聯して考慮さるべく、清朝の勢力の地的基礎はこれによつて確立したものと云ふべきである以上、此旗地の設定は、内外兩方面の形勢の推移、當時に於ける政治的情勢の變遷に非常なる關係ある事を察知すべきであると信ずる。

以上滿文老檔太祖紀に見える記事により、清初太祖時代の旗地に關して記述した。これが次の太宗時代に於て如何になるか、前號所載の拙稿(上)第三頁に引用した所の鐵嶺・安平・石城その他に移駐した記事との關係如何等も、併せ述ぶべきであるが、今は唯老檔太祖紀により太祖時代の旗地に關して述るに止め他は後日改めて述る事にした。

註記

- ① 宜罕山城は烏喇の屬城であり、之を太祖の軍が攻略したのは、戊申の年即ち萬曆三十六年の事である。太祖武皇帝實錄には、戊申年三月。太祖令子阿兒哈兔士門及姪阿敏台吉領兵五千。往兀喇部圍巽惡山城。尅之。殺千餘人。獲甲三百副。盡收人畜而回。と記し、滿文實錄でも同様の記載をなし、巽惡山を宜罕山^{ᡶᡳᡨᡳᡳᡳ} (牛山の義)と記して居る。天命建元前より數年前の事であり、その以前より築城されて居た筈である以上、烏喇或はそれより稍南方の吉林城附近で、古城の一とみても差障りはないと思ふ。

- ② 阿布達哩岡の文字は、清朝の實錄では康熙修本太祖實錄と滿洲實錄の薩爾解役の條に見えて居り、武皇帝實錄では阿布答里山と記す。朝鮮側の記録、例へば李長霖の柵中日錄では、之に當る地名を富車と言つて居るが滿文老檔でも同じく^{ᡶᡳᡨᡳᡳᡳ}と記し、二者一致する。劉綎の軍は三月二日瓦原喀什即ち深河に着き、四日に阿布達哩岡即ち富車に着いたのであるから、阿布達哩岡

が北に在るべきであるが、輿圖によれば、阿布達哩岡が南に、瓦原喀什河が北に在るやうになつて居るのは、何か誤謬に基くものであらうか。

③ *che sun* は滿洲語の意味では悪い日、太陽の義である。正しくこの意味に當る漢字の地名はないが、或は爨陽堡を意譯して、爨を *che* 陽を *sun* と譯したとも考へられぬ事もない。但し輿圖には *ch'ang pu* と音譯して居る。

④ 吉林通志卷二十二、水道表、伊勒門河の條に、その支流として蘇幹延河を記し、その註に之が蘇完なる事、又刷燂、雙陽とも記される事、幹を誤つて幹と記す事等を述べて居るのは、正鶴を得たものであらう。然る時、吉林府圖の伊勒門河の西に雙陽河を記し、その中流域に蘇瓦延站を記入して居るのは、又この輿圖の *suwayan bira* と *suwayan s'yanun* とに正しく一致するものと考へる。

⑤ 本稿(上)第三頁所引の記事参照。

⑥ この項以下に見える明の清朝への對策は、明實錄、三朝通事實錄、明史列傳その他關係史料を總括大約したものであつて、今一々註記する事を略した。(昭和十三年二月十日稿)